



ニュースレター No.35 2000年(平成12年)6月

NEWSLETTER

INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE FOUNDATION

財団法人 国際湖沼環境委員会

— よりよい湖沼管理をめざして —

このニュースレターには英語版もあります。

科学委員会緊急ビューローミーティング ILECの今後の取り組みを協議



科学委員会ビューローミーティング風景

1 ILEC 科学委員会緊急ビューローミーティングが開催されました。ここでは、今後のプロジェクトに果すべき科学委員の役割を協議すると共に、2000年4月に滋賀県の津市で開催されたG8環境大臣会合に際して扱われるべき淡水問題についても検討されました。今後の ILEC プロジェクトに関しては、ILEC 発行のジャーナルに Lake99 出席者の寄稿をもっと取り入れること、ジャーナル発行資金確保など多くの点についても話し合われました。また、2001年に予定されている琵琶湖での次期湖沼会議「びわこ 2001」については、湖沼会議直前に過去10回に及ぶJICA湖沼保全コースに参加した研修生達を集めて

3週間の研修を開いたり、“世界水パートナーシップ会議”を同じ時期に開催することについても議論されました。

新 ガイドラインシリーズには“富栄養化”と“温暖化”の2つが加わることになりましたが、新シリーズ発行に当たっては、出版と販売を任せる出版会社を獲得してはどの案が出されました。世界の湖沼白書として世界の代表的な25の湖沼に的をしぼって調査研究を始めることとなり、対象湖沼の選定につき ILEC 科学委員全員に意見を聞くことになりました。

おそらく、ミーティングで話し合われた後、もっとも重要な課題は G8 に向けた淡水問題であったと思われます。世

界中で淡水が危機に直面していますが、残念なことに政治家は主要な国際的議題として考えていませんでした。国民が自らも開発による汚染にさらされているといった事実やそれについての知識を十分に与えられてこなかったことが最大の理由なのです。(そのことについては、本注記事中の世界の湖沼に記載)

I ILEC 科学委員は滋賀で開催される G8 環境大臣会合にこの緊急ビューローミーティングでの検討結果が一定の影響を与えることを期待しています。なお、G8 環境大臣会合の提言は P.2 に掲載しています。次号には、この提言に対する成果としての関連記事を掲載できればと考えています。

今回の話題

- ・第二回世界水フォーラム……………2
- ・G8 環境大臣会談……………2
- ・UNEP 事務局長の滋賀と大阪訪問…3
- ・ILEC 活動(1997~1999)……………5
- ・世界環境デー記念式典……………7
- ・新刊案内および今後の会議……………8
- ・第3回リビングレイクス会議……………2
- ・新所長、新事務局長の紹介……………3
- ・西ノ湖とヨシ……………4
- ・世界の湖沼(モノ湖)……………6
- ・ILEC/JICA 研修員の視点……………7
- ・世界湖沼会議(琵琶湖 2001)……………8

会 議

第2回世界水フォーラム

2000年3月17日から22日の間、ハーグで開催された第2回世界水フォーラムにおいて、水資源の持続可能な利用の実現に向けて必要とされる活動に焦点が当てられました。当フォーラムに出席した世界各地の代表者がそれぞれの地域状況を説明する論文発表を行うと共に、水利用、主要な共同取組みおよび都市計画と水利用に関する管理のあり方といった特別課題についても意見が交わされました。ILEC 科学委員であるW.D.ウイリアム教授が同会議で発表した論文の要約は次のとおりです。なお、第2回世界水フォーラム

についての詳細は、次号にてお知らせする予定です。

世 界の乾燥化が進んでいます、すなわち強度乾燥地帯から半湿潤地帯にかけて、および温暖温帯から熱帯にかけて、いわゆる“乾燥化”が全土地面積のほとんど50%にも及んでいます。このような地域の人口は10億人に達しており、同時に水不足が関連してくる一方、そこには世界でも大きい類に入る湖沼がいくつか存在します。それらの湖沼は淡水湖沼、一時の淡水湖沼、および塩湖などの様々

なタイプに分けられますが、その陸水学的特徴は、よく知られているような温帯でかつ湿潤な地域に存在する湖沼とはかなり異なってきます。経済面においても、学術的および生態学的な側面においても重要性をもつにもかかわらず、乾燥化した地域の湖沼は広範囲でかつ集中的な人為的影響を受け姿を変えています。このような現象は、温帯、熱帯、亜熱帯を問わず惹起されてきています。更に、乾燥化している地帯の湖沼にみられる特色として、塩分濃度の上昇があげられます。しかしながら、このような人為的影響とそのことがもたらす深刻な問題は、国民レベルおよび国際レベルでもいまだ十分に認識されていません。

第3回リビングレイクス会議

第3回リビングレイクス会議が「小川の復元と湖沼を回復させる地域社会」というテーマで1999年10月1～4日にかけてアメリカ合衆国カルフォルニア州リーバイニングのモノ湖畔にて開催されました。その構成は、ワークショップ、内部打合せ、現地視察というものでした。ワークショップの議題は①パートナーシップの効果②持続可能な地域社会

③経済発展と復元④リビングレイクス・ネットワークです。

内 部打合せでは Nerfork(英国)、Tengiz湖(カザフスタン)、死海(ヨルダン、イスラエルとパキスタン)、Militsch 池(ポーランド)、Chiquitamar(アルゼンチン)のリビングレイ

クスへの加入が了承されました。そして、ILEC を含めたメンバー達は、世界湖沼憲章、リビングレイクス決議文、ネットワークの構築と将来の活動などの議題について議論し合いました。次回リビングレイクス会議は、2000年ハノーバー万博にあわせてハノーバーにて開催され、引き続いて2000年11月に日本の滋賀県で開催される予定です。

滋賀県大津市でG8環境大臣会議が開催

世界的な淡水の危機について討議するため、1999年の11月29日から12月1日の期間、滋賀県において、国際湖沼環境委員会の科学委員会が開催されました。声明書が立案され、そして会議の準備を担当していた滋賀県知事を通して、日本の環境庁長官へ提出されました。次に示す事項が声明書のハイライトです。全世界が淡水の量と品質で世界的な危機に直面します。淡水の危機は、すべての国の経済そして国民の健康の両方に影響を与えます。
・淡水の不足がすべての国における開発を阻害します。
・水系で感染する病気は健康障害を増やします。そして、職場において、病気あるいは亡くなった方への経済支援に加えてヘルスケアのコストは増加します。
・環境ホルモンが陸及び水環境中に撒き散らされ、環境ホルモンは人

間そして野生生物の健康に大きな危険となります。淡水の不足が農産物の世界的な貿易に重要な意味を持っています。科学者は十分に淡水の危機に気づいていません。しかし、世論と政策の対応が遅れてしまいました。
・最近 UNEP が行った 50 の国の 200 人の専門家の環境課題調査において、淡水の不足は気候変動を除くと他の環境問題より重要と位置付けられました。環境の反応は、先を見通さなければなりません。
・環境問題の経験は、防止策を実施することのほうが、改善策を実施するより、安価であることを示しています。
・速やかな対処がないと、問題はもっと悪化し、そして解決することが一層困難となるでしょう。汚染物質の確認は問題を解くことにおける第一歩です。
・給水のための適切なインフラについて、十分なインフォメーション

が無いと、公衆衛生を広めることは出来ません。
・水質測定のコストは、技術革新によって際立って減ってきました。
・現在の国際的なモニタリングの作業が大いに改善されます。私たちは G8 の環境大臣たちが以下の事項を解決し、国家的そして国際的な革新的モニタリング計画を支援することを勧めます。
・淡水資源の一層集中的、包括的なアセスメントの規定
・緊急に富栄養化と有毒な化学薬品の排出の結果として生じている世界的な水質汚染問題や次の課題に関心が払われるべきです。
・例えば湖の深部の水温の暖化を通して、気候変化による世界的な淡水資源における基本的変化のアセスメントを可能とする
・水問題についての教育そして情報宣伝を改善する新しい方法の模索
私たちは、次のニューズレターで会議のリポートを掲載する予定です。

お知らせ・紹介

UNEP-IETC 新所長、ILEC 新事務局長

UNEP 国際環境技術センター (IETC) の新所長に、ステューブ・ホールズ氏が就任されました。ホールズ博士は、これまで20年にわたって環境科学者、研究者として500件以上の調査・コンサルティング事業に従事してきました。これらの事業の多くは国際機関（例えば欧州委員会、世界銀行、WHO）、NGO 団体、政府部局や広範囲な産業事業体（とりわけ石油・化学分野）などの組織のために行われてきました。博士は欧州委員会へ積極的に参加し、「エコマネジメントと監査の枠組」に関する規定づくりを推進しました。また、最近までベッドフォー

ドシャー州（英国）のローカルアジェンダ 21 運営グループおよびルートン環境援助プログラム（中小企業が持続可能な経営、事業活動、製品づくりを伸張するための支援を意図したプログラム）の議長をそれぞれ勤めていました。

加えて、ホールズ博士は欧州における廃棄物管理のための政策・戦略に関する欧州委員会運営グループのメンバーとなっています。また、欧州環境・開発学会の事務局長でもあります。この学会は、持続可能な開発、環境基準、専門性の向上などの促進を目的とした全欧州組織です。

新所長は、環境上適正な技術 (EST) 情報を必要としている人々に提供し、最も効果的に適用できるよう研修することにより、IETC は持続可能な開発を達成する上で重要な役割を果たすとしています。

ILEC の新事務局長に小谷博哉氏が就任しました。小谷氏は34年間にわたって琵琶湖関係の業務を行うとともに、滋賀県環境関連条例や規則の制定に積極的に関ってきました。また、小谷氏は専務理事としてILECの活動を支援してきました。今、氏は2001年11月に開催される第9回世界湖沼会議“Biwako2001”の成功に向けて全精力を傾注しているところです。小谷氏の強力なリーダーシップのもと、ILECの活動がさらに前進していくものと期待されています。小谷氏は、1996年から事務局長を務められていた今井清氏の後任です。今井氏は現在、下水道会社の副理事長を務めています。



ホールズ所長と小谷事務局長

UNEP 事務局長が滋賀と大阪を表敬訪問

クラウス・テップファーUNEP 事務局長がUNEP 代表団とともに滋賀県と大阪府を表敬訪問し、これまでの両府県と大阪市からの国連環境計画国際環境技術センター (IETC) に対する支持に感謝の意を表明しました。

表敬訪問中、テップファー事務局長は国松滋賀県知事らから、現在自治体で取り組んでいる様々な環境保全活動について説明を受け、又知事らは今後も引き続

き、国際環境技術センター (UNEP-IETC) を支える2財団、滋賀県の財団法人国際湖沼環境委員会 (ILEC) と大阪府の財団法人地球環境センターをサポートしていくことをテップファー事務局長に約束しました。

今回テップファー事務局長に同行したのは、パリ事務所のジャクリン・アロイス・デ・ラーデル技術・産業・経済部長、バンコクのアジア太平洋事務所の名執芳博副所長、国

連環境計画国際環境技術センター (IETC) のリリア・カサノバ副所長でした。



クラウス・テップファー博士

西ノ湖とヨシー竹田 勝博氏寄稿文

私は滋賀県の内湖である西ノ湖の湖面を見つめてヨシを生活の糧として、代々自然の変化と湖の動きをヨシを通して視てきました。

元々の内湖としては、大中ノ湖・小中ノ湖・西ノ湖の三つが合わさり琵琶湖に美しい水環境を作り、周辺中央部にヨシ島が群生繁茂して大変美しいヨシが生産されていました。

それが太平洋戦争末期の食料不足で小中ノ湖が干陸されるに際しては、多くのヨシ地を使い、食料増産の為に、国家的見地から協力させて頂きました。又大中ノ湖についても食料の必要性はやや弱まってはきていましたが、これも協力して、二度に亘る干拓事業がなされました。

大中ノ湖干拓築堤は、当時、安土ヨシ業者の祖父と二、三人の関係者等により話し合わせ、ヨシ地を大切にしておヨシを減らさないように考え、ヨシ地内へ築堤しないよう働き掛け、ヨシ島より沖合へ 50 メートルの現在の位置に話し合いをして、その上で干拓工事に協力してきました。これは、ヨシ島をそのまま残す事が目的なものでした。

しかし、大中ノ湖干拓工事の最中、大中ノ湖干拓工事事務所よりついでに西ノ湖干拓計画を建てて、広大なヨシ地を持っている、ヨシ地業界へ再度協力要請相談がありました。

でも、西ノ湖まで干陸されれば近江特産ヨシは、破滅の状態となるので、絶対反対を唱え、最後の生活の場を守ってきました。

そして昭和 30 年代の農家は食料増産の時代でもありました。父は既製田とヨシ地、地先の田を物物交換して、その田にヨシを植栽してヨシ地を造成し、小中ノ湖・大中ノ湖干拓で提供してきた分、ヨシを育成してきました。

大中ノ湖干拓工事が終わりに近づいた時、西ノ湖も干拓工事をしようと話があったのですが、それには大反

対をして西ノ湖だけは残ったので、その結果、ヨシ地私有面積 2.5 ヘクタールと刈り取り面積 12 ヘクタールを刈り取っています。しかし、そのヨシは最近特に悪くなり、色艶がなく、黒ずんだヨシばかりになってしまいました。

昔

は細工ヨシと言って、良いヨシの中から悪いヨシを選び出していました。30 年前頃から 10 年前頃までは悪い中から良いヨシを取り出さなければならぬ状態が続いており、その事態を私は嘆きましたが、今ではそれもできない状態で、全部ヨシの皮を剥いて見る、1 割程の良いヨシしか出せず、手間にならないので、仕事としてやっていけないのです。

現ヨシが悪くなっていく中で私は、良いヨシも悪いヨシも使える屋根に活用を考え現在屋根職人としてやっております。ヨシ葺き屋根とは、昔から茅葺き屋根の最高の屋根として評価しており、仕上げた屋根は黄金色に見え、どっしりとした重圧感で、日本建築のすばらしさを物語っているように聞こえてきます。ところがその屋根も年々少なくなり、屋根仕事をする職人が少なくなってくる中、何とかしてヨシの商品開発が出来ないものかと必死に取り組んでいると

ころへ、滋賀県が、平成 3 年から琵琶湖の環境問題にヨシを取り上げて、ヨシの風景、護岸の侵食防止、自然環境、水質の浄化などのテーマにヨシ条例を平成 4 年 7 月 1 日より発足しました。そして県では保護地区、保全地域、普通地域としてヨシ群落を増やし、冬にヨシ刈り・火入れ・清掃の維持管理をしていこうとしています。しかしこの維持管理に大切な税金を使っています。私はヨシの商品開発をして、商品的付加価値が上がれば、刈り取り費用を出さないうで、昔の活況時のヨシのように刈り取りの権利を競争入札で買い取る状態にする、ヨシの高付加商品開発を考えています。

ヨシ条例がきっかけで、平成 4 年より大阪のデザイナーのグループが、ヨシの生産やヨシの特性を勉強したいとのことで、ヨシの刈り取りを手伝ってもらえるようになり、広いヨシ地で汗をかいて 1 日過ごすのも貴重な体験のようでした。楽しんでやっておりますが、双方、ヨシのボランティア活動の一環として、ヨシの商品開発にはヨシの無償提供をしています。

その後、滋賀県立近代美術館で第 1 回「考えるヨシ展」を開催し、各地でミニ展を展開。そこでは、ヨシへの



竹田氏と見学者

関心を高めることが出来たと思っております。

その出展作品の中で開発したヨシ紙は大変すばらしい風合いです。そこへ、地元大津絵という民画を招くと、素朴な紙に良く映えて紙と絵との取り合いが、すばらしいものと感じ、皆に見てもらいたいと考え「ヨシと大津絵展」を、大津の西武百貨店で1週間行いました。

さらに、「ヨシと照明器具展」を別の大阪のデザイナーが中心となって、大阪と大津で行いました。

日夜、商品開発は行っていますが、まだ今のところ、自分自身の納得出来るヨシの特性を十分生かしたといえる最高の商品は作り出されてはいません。時間をかけて日夜研究を続けて行えば何とか答えは出てくるものと考えやっています。

ボランティアのヨシ刈りによって、ヨシと水環境を考えてもらいます。そのことがきっかけとなり、ヨシの生育や特性を考えてもらえるようになったことは、私にとって、希望するところでもあります。

我々ヨシ屋がヨシ地を残して、西ノ湖を守ってきました。私は、ヨシの商品開発とボランティア活動を通して皆様に、水環境にヨシが大切であることを訴えているのです。

そこで提案ですが、西ノ湖を実験湖として、水環境のすばらしい湖になるよう運動していくことでヨシも昔の美しいヨシが戻ってくると思っています。河川の河口付近で水の浄化施設を造って美しい水だけを湖に流すようにします。そして、それでもなお浄化できない窒素やリンはヨシが吸収してくれます。そのことによって、水質浄化ができ、美しい水と湖が戻るように思います。

琵琶湖の日に、西ノ湖に面した流域交流会がもたれ、西の湖流域条例なるものを造って、地域の人々に水環境への協力を申し合わせする動きもあります。

流域条例が考えられてきているということは、皆が関心を持ってきたことの現れであり、その動きは、私の励みとなっております。

西ノ湖を琵琶湖のモデル湖として美しいを戻すことを希望します。美しい琵琶湖を取り戻すために西ノ湖から進めていき、水もヨシも湖の環境が良くなることで、琵琶湖が元の

ILEC活動 (1997~1999)

1997年 1月20日~3月19日---第7回湖沼水質保全研修(ILEC/JICA)共催

5月14日-----ILEC科学委員会ビュ・ロ・ミ・ティク(草津)

6月21~28日-----ICAL'97 世界古代湖会議(草津)後援

7月28~30日-----第2回環境教育トレーニングコース(タイ国チェンマイ)

10月26、31日 11月2日 第8回 ILEC 科学委員会総会(アルゼンチン)

10月24~25日-----アルゼンチンの湖沼の持続可能な管理に関するワークショップ(アルゼンチン)

10月27~30日-----第7回世界湖沼会議 ラカル'97

10月28日-----生物指標に関するワークショップ(アルゼンチン)

12月1~10日-----国際連合気候変動枠組み条約第3回締約国会議(京都)に参加

1998年 1月19日~3月20日---第8回湖沼水質保全研修(ILEC/JICA)共催

6月5日-----世界環境デー記念ミシソホジウム「生命の水を守ることを通して地球の環境問題を考える」(草津市)

7月20~22, 27~29日-----第3回環境教育トレーニングコース(タイ国チェンマイ、パッタニ)

8月8日-----ILEC 科学委員会ビュ・ロ・ミ・ティク(スウェーデン、ストックホルム)

10月21~23日-----滋賀環境ビジネスマッチに IETC と共同出展

1999年 1月18日~3月19日---第9回湖沼水質保全研修(ILEC/JICA)共催

5月6~8日-----リベングレイクス国際会議「レクリエーションと湖沼回復」(ドイツ、コンスタンツ湖畔)

5月16, 24~25日-----第9回 ILEC 科学委員会総会(デンマーク)

5月17~21日-----第8回世界湖沼会議 Lake99

6月13日-----世界環境デー記念ミシソホジウム「みんなで話そう!美しい湖をめざして!!」(草津市)

9月29日~10月7日-----リベングレイクス第3回国際会議「川と湖沼の回復・コミュニティの再生」



Lacar '97会議風景

世界の湖沼

モノ湖ーアメリカ合衆国 中村 正久

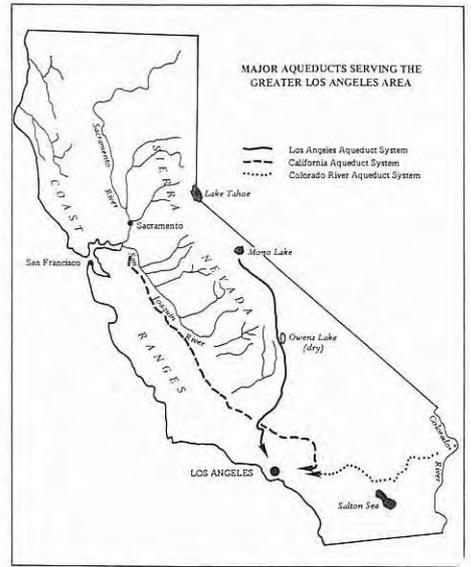
1999年10月、アメリカ合衆国カリフォルニア州リーバニング市において第3回リビングレイクス国際会議が開催されました。私をはじめ、ILEC事務局の白井氏、UNEP国際環境技術センターの坂口氏、滋賀県立大学の西尾さんが琵琶湖チームとして同会議に参加しました。会議は、1998年4月にドイツが基盤となつて設立した組織である地球自然基金(GNF)の支援のもと開催されました。GNFの主な目的は、国際レベルでの持続可能な開発目標を促進することであり、国際環境保全プロジェクトへの支援提供および各プロジェクト間のネットワークの普及などが行われます。リビングレイクスは、GNFの最も重要なプロジェクトであり最も成功したプロジェクトです。



モノ湖

モノ湖委員会による資料によると、非営利市民グループが湖の保全に専念してきており、モノ湖の魅力ある存在とその開発および保全の歴史は以下に述べていきます。モノ湖は、約70平方マイル(約180km²)の表面積をもち、深さは最深約145フィート(約44m)に達します。湖は、シエラネバダ山脈東部の標高約6,500フィート(2000m)にた位置する24マイル(39km)にわたる砂漠盆地の中にあります。湖は、76万年以上前にできたもので、北アメリカの中で最も古い湖のひとつです。また、末期湖沼であるため、湖水の塩分濃度は海水の2倍あり、多量の鉱物を含み硬度は海水の80倍になります。したがって、湖には、塩水エビとアルカリ蠅のたまたま、種類その数は驚くほど多く、世界でも生物生産性の高い生態系を湖沼のひとつとなっています。

湖に降り立ちます。更に付け加えると、毎年モノ湖流域を経由する水鳥として、79種類の前記に記録されています。20年前に自然保護論者達は、モノ湖が衰退し続けていることを予測し、ロサンゼルス市の過剰な水消費を減らすことにより、湖を救うことを目的としてモノ湖委員会を1978年に設立しました。モノ湖委員会と他の自然保護グループの支援により20年間にわたる交渉、裁判所への申し立て、そしてサンゼルス市の水質保全事業は、歩み寄りの方向へと向かいました。1994年にカリフォルニア州は、河川の流水の一部のみを分水して水利用を行う決定を下しました。1994年より、湖の水位は9フィート上昇しました。現在、100種類以上もの水鳥が、彼らの長い飛行においてモノ湖を休息地として利用しています。モノ湖委員会は、18,000人の関係者個人会員から資金提供され、その活動はモノ湖そのもの過剰な水利用の影響についての一般市民向け教育を始めとし、モノ湖保全し環境問題を他の領域に転化せず、本質的な水の必要性を満たすような協力的な解決策に至る様々な活動を行っています。



Water diverted from the Mono Basin travels down the east side of the Sierra Nevada, past the dry bed of Owens Lake and on to Los Angeles. The city obtains water from northern California and the Colorado River as well. Map by Sharon Johnson.

モノ湖の位置

湖

の300マイル(480km)南方に位置するロサンゼルス市の水需要により、モノ湖は劇的に変貌させられました。

1941年に湖に流入する5河川のうち4河川が、ロサンゼルス市に分水されましたが、このことにより湖水の塩分濃度が倍になり、湖の表面積は元々の大きさの3分の1にまで減少するなど、湖に大きな影響を及ぼす結果となりました。またこの影響は、50,000羽以上のカヌーが、カリフォルニアカモメと湖岸に生息するその他の渡り鳥の住処も脅かしました。絶滅が危惧される鳥の中には、約80,000羽ものウィルソンヒレアシギ(世界の生息数の10%)も含まれていました。毎年、約150万羽生まれているカイツブリ(北アメリカで生息数の30%)が、カナダおよびアラスカの生殖地から南へ移動し、モノ

湖を休息地として利用しています。モノ湖委員会は、18,000人の関係者個人会員から資金提供され、その活動はモノ湖そのもの過剰な水利用の影響についての一般市民向け教育を始めとし、モノ湖保全し環境問題を他の領域に転化せず、本質的な水の必要性を満たすような協力的な解決策に至る様々な活動を行っています。

4日間の会議中、ロサンゼルス市とモノ湖委員会が率いる自然保護グループとの間に生じた対立について、どのように進展していったのか、また最終的にどのような結果となったのか、直接学ぶ機会が得られました。モノ湖委員会の代表者および関係団体は、ロサンゼルス市、州水資源管理委員会および大気汚染管理委員会からの各代表者、また元参加者、ロサンゼルス市と自然保護グループとの対立、裁判上の激しいやりとり、および科学者の役割など

彼らのこれまでに至る経験談を語ってくれました。判決後は、ロサンゼルス市と住民による水保護と水再利用という双方に有益な解決に向け、共に努力してきました。モノ湖を救う活動のおかげで設立された保護と再利用計画がなければ、ロサンゼルス市は毎日何十万トン(何千万ドル)の予算を浪費していたであろうと報告されています。

また同会議に出席していた著名な南アフリカの作家であるクレド・ムツア氏は、会議のはじめに“あなたがたが各湖沼を復旧させるということは、世界全体が救われることにつながります”と述べました。この発言内容は、会議ですばらしい話を学んだ後、参加者すべてが感じた感想のものでした。

イベント

毎日を「世界環境デー」にしましょう。1999年「世界環境デー」の記念式典を東京で開催

毎年6月5日は「世界環境デー」です。昨年は東京が開催地に選ばれ、様々な行事が行われました。クラウド・トップファーUNEP事務局長の発表した1999年のテーマは、「私たちの地球、私たちの未来、救うのは今！」でした。更に、トップファー事務局長は、『私たちのたった一つの地球のために、地球環境へのダメージをこれ以上上げないよう、ひとりひとりが責任意識をもって努力し、実践していきましょう』と呼びかけました。UNEPでは毎年「世界環境デー」の記念式典開催都市を選んでいます。1999年は東京で、なかでも「世界環境デー」における最大のイベントは、UNEPの「グローバル500賞」の授賞式で、17の個人及び組織計12ヶ国の受賞者に贈られました。この賞は環境保全に大きく献身した環境活動家及び組織の業績を称えるもので、贈呈はトップファー事務局長と真鍋賢二環境庁長官により行われました。

また基調講演の中でトップファー事務局長は、『今こそ行動の時。』と市民に呼びかけ、『この記念すべき国連の祝典をきっかけとして、安易な開発や環境破壊をくいとめ、次のミレニアムの為に環境に対する姿勢を常に見つめ、改善して行きましょう。』と訴えました。『全人類の行いが地球に影響を与え、また地球の状態は、私たち全員に影響してくるのです。』というコフィー・アナン国連事務総長からのメッセージをUNEPのトール・プレビック スポークスマンが代読し、また、スポークスマンが『毎日が世界環境デーとなるべきであり、そうなるまで、国連は私たちの地球とそこで今後も生活していく子孫の為に、真摯な姿勢で責任を全うしていく所存です』と付け加えました。UNEPは地域および地球規模で新しい変化をもたらすことを目指して、人と地域社会を啓発するため、6月5日を「世界環境デー」と定め祝っています。

UNEP-IETCでは、地域で進められている環境プログラムがさらに進展していくよう支援することにより、地域住民が環境問題について理解を深め、毎日が「環境デー」となるための協力をしています。UNEP-IETCではそれらの活動が拡大し、定着するように助言を行ったり、出版、人材育成、情報提供などの事業を行っています。IETCの情報交換ネットワークソフトとして導入されたmaESTroは、ますますその知名度を上げて世界中のESTの情報にアクセスし、ネットワーク網をさらに広げています。環境保全の活動をするのに6月5日を待つことはありません。「世界環境デー」の活動を意義あるものとするには、私たち一人一人が自分たちの地球環境を守るために毎日できることをしていくことです。そうすることで、みんな一人一人が責任を負っている地球環境に良い影響をもたらすことにつながって行くのです。

世界環境デー (World Environmental Day)

「世界環境デー」は国連人間環境会議（ストックホルム会議）の開催を記念し、1972年の国連総会において定められました。同時に国連総会は、UNEPの設立にいたる議決案を採択しました。「世界環境デー」は、環境に焦点をあてた活動を組織する政府・個人・地域団体と共に行う、みんなのイベントです。

UNEP「グローバル500賞」

この賞はUNEPが1987年に環境保全に献身した功績を称えるために設けたもので、地球環境保全のために第一線で活躍し、その成功を称えるものです。毎年、その顕著な業績を残した個人または組織に贈られます。

研 修 JICA/ILEC 湖沼水質保全研修

ブラジルからの研修生—ソニア・ポウリス・マトス

水という再生可能な資源は人間の生活および活動に極めて重要なものであり、人間の文明は常に水域の存在するところにあるといえます。残念なことに、この密接な関係が水資源を悪化させる主な要因となっているのです。水質汚濁は、国境を超え地形の限界まで広がっており、世界的な問題として取り上げられなければなりません。

JICA 湖沼水質保全コースは、日本とアメリカ大陸、アフリカ大陸およびアジア諸国におよぶ開発途上国との結びつきを深めるものです。日本と開発途上国の文化や社会性、経済面は異なるにもかかわらず、汚染源および富栄養化など汚染により生じた結果は、ほとんど同じといえます。このコースの大きな長所は、琵琶湖という実際モデルをもとにした内容となっていることです。

2ヶ月の研修期間中、湖沼の生態系における水質汚濁と日本の技術でそれを管理し軽減していく関係について学びました。このコースは、単なる技術的科学的説明にとどまらず、必要とされる問題提起や解決策までも含んでいます。それにもかかわらず、日本が私達の国と同じように開発途上国だった時、環境問題と大きく直面し十分に解決されないものもありました。日本の歴史の一部ともいえる環境にかかわる過ちから、私達は多くを学ぶことができそうです。更につけ加えると、環境保全に取り組む滋賀県の住民の多さに驚かされています。琵琶湖が社会的、経済的そして環境面においても宝物であることをすべての住民が認識しています。

研

究の先駆者であり豊富な経験をお持ちの吉良先生、合併浄化槽システムの技術的実用的知識をお持ちの藤井氏、

25年間環境汚染の回復に力をそそいできたRKエキセルの山本氏、ヨシの紹介をしていただいた竹田氏をはじめ、この研修中に多くの貴重な出会いがありました。最後に、「私達の湖沼」について、また私達の生活のありかたについて教えていただいた全ての皆様に感謝を申し上げます。



見学先での研修生
(右から三番目がソニアさん)

第9回 世界湖沼会議

第9回世界湖沼会議が2001年11月11日～16日に滋賀県で開催されます。会議のテーマは「湖沼をめぐる命といとなみへのパートナーシップ ～地球淡水資源の保全と回復の実現に向けて～」です。分科会構成等については、近々公式アナウンスされる予定です。

詳細についての連絡先：滋賀県庁琵琶湖環境部環境政策課
〒520-8577 滋賀県大津市京町 4-1-1

Tel: 077-528-3466 Fax: 077-528-4849

E-mail: lake2001@pref.shiga.jp

ホームページ: <http://www.pref.shiga.jp/lake2001/japanese/index.html>

第10回 生態学琵琶湖賞

第10回生態学琵琶湖賞は、本年5月22日に応募が締め切られました。本賞では、2名の研究者を表彰し、滋賀県知事から賞状と500万円が贈られます。受賞者は本年8月に決定され、10月に授賞式が開催されます。詳細についての連絡先：滋賀県庁琵琶湖環境部環境政策課内「生態学琵琶湖賞」事務局

〒520-8577 滋賀県大津市京町 4-1-1

Tel: 077-528-3451 Fax: 077-528-4844

E-mail: de00@pref.shiga.jp

ホームページ: <http://www.ilec.or.jp/prize/j-index.html>

新刊案内

今後の会議

オーストラリアの淡水の自然環境－プロセスと制御

Andrew J. Boulton, Maragaret A. Burock (Gleneagles 出版)

ISBN: 1-875553-05-3

本書は、重要な生態学的過程を説明するため、オーストラリアの例を使用して、内陸の淡水と塩水の物理、化学、生物学的な特徴を記述します。本書の主題はオーストラリアの湿地とそれら集水域の環境汚染の兆候を取り扱うより、生態学的過程の理解と個々の事例の検討の必要性にあります。

陸水学－1999年第9回IHPトレーニングコースのための教科書

寺井 久慈編集

(名古屋大学大気水圏科学研究所)

ISBN: 4-9980619-1-7

本書は1999年の7月、8月に名古屋で行われた第9回IHPトレーニング

コースのために用意されました。本書の内容は生徒が陸水学の基礎と最新の知識を短い一定の期間で習得することが出来るよう、選択・構成されています。

湿地の未来－第5回のINTECOLの世界湿地会議からの寄稿文

J. McComb と J. A. Davis 編集 (Gleneagles 出版)

ISBN: 1-875553-04-5

本書は完全な招待公演記録を掲載しています。そして論文は招待公演のあった、多くのシンポジウムと特別な講習会の研究部門と管理部門から選択されました。

本書は湿地生態学者と管理者に旺盛な興味をわかせることでしょう。そして陸水学者、水資源学者、湿地の未来に興味や関心のある方全てに対しても同様の興味をわかせることでしょう。

給水と水質

日時: 平成12年9月12～13日

問合先: J. Oleszkiewicz 教授

電話: 48-12-423 0855 (61)

FAX: 48-12-421 8199

Eメール: Oleszkie @cc.

umanitoba.caoffice @

lemprojekt.com.pl

URL: <http://www.lemprojekt.com.pl/water2000/>



INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE FOUNDATION

Secretariat

1091, Oroshimo-cho, Kusatsu-city, Shiga 525-0001, Japan

Tel: +81-77-568-4567

Fax: +81-77-568-4568

e-mail: info@mail.ilec.or.jp

URL: <http://www.ilec.or.jp/>

財団法人 国際湖沼環境委員会事務局

〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091

TEL: 077-568-4567 FAX: 077-568-4568